

うち
しろ
あと
内城跡

無線通信基地局の新設に伴う埋蔵文化財調査報告書



2006

宮崎市教育委員会

序

宮崎市教育委員会は、平成17年度から平成18年度にわたりKDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターの依頼を受け宮崎市佐上原町東上那珂字内城内に無線通信基地局新設事業に伴う内城跡の発掘調査を実施しました。本書には、その成果をまとめて記載しています。

記載内容としては、出土遺構・遺物から中世期における城館遺構のあり方を地形の特性や活用からどのように読み取るか、さらに城館以前の旧石器・縄文時代の地形の用い方との繋がりを述べています。今回の調査によって、内城跡発掘調査の担当機関はそれぞれ異なりますが通算3回目となりました。その結果、多少なりとも内城跡の実像に迫る事ができたのではないかと思います。

本書が学術資料としても、または生涯学習として市民への活用や学校教育の資料に広く用いられ歴史に興味をもつききっかけになる事を期待しています。

最後になりましたが、発掘調査にあたりましてご協力いただきました関係機関の皆様及び作業にかかわられた方に心より感謝申し上げます。

平成18年9月

宮崎市教育委員会
教育長 内藤泰夫

例　　言

- 1 本書は、KDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターが計画した無線通信基地局の新設に伴う事前調査として宮崎市教育委員会が実施した内城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、KDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターの依頼を受け、宮崎市教育委員会が主体となり、平成17年度に文化振興課文化財係が実施した。
- 3 発掘調査は、平成18年2月22日から3月30日まで実施した。
- 4 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図『佐土原』をもとに作成した。
- 5 遺構の記録は、平面図及び断面図は平板測量（50分の1縮尺）で、また土層図は20分の1縮尺で行った。
- 6 挿図目次第5図は、佐土原町教育委員会『佐土原町の中・近世城館』第2図内城縄張図P18、挿図目次第6図は、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第51集『内城跡』第8図（S=1/400）P13-P14、挿図目次第7図は、佐土原町文化財調査報告書第19集『内城第1遺跡』第6図内城第1遺跡遺構分布図P16から転載した。
- 7 本書で使用した写真は、現地及び遺物写真を木村が撮影し、航空写真の撮影は九州航空株式会社に委託した。
- 8 遺物・図面の整理及び遺物の実測・拓本・計測などについては、佐土原出土文化財管理センターの整理作業員が行った。
- 9 上層断面図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準上色帖」による。
10. 方位は、磁北、レベルは海拔高である。
11. 遺構の略号は以下の通りである。
P…柱穴 SE…溝状遺構 S I …集石状遺構 SX…性格不明土坑
12. 本書の執筆・編集は、木村明史が担当した。
13. 本調査に関する遺物・実測図などは佐土原出土文化財管理センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめ	1
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 調査の組織	1
	第3節 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章	調査の概要	5
	第1節 調査の経緯	5
	第2節 基本層序	6
第Ⅲ章	調査の記録	8
	第1節 従来の調査記録	8
	第2節 城郭関連遺構	8
	第3節 集石状遺構	10
	第4節 出土遺物	20
第Ⅳ章	まとめ	28

挿図目次

第1図	内城跡の位置と周辺の主な遺跡	3
第2図	内城跡周辺地形図及び調査区域	4
第3図	内城跡基本層序模式図	7
第4図	従来、調査された内城跡の基本層序模式図	7
第5図	内城跡縄張図	11
第6図	内城跡曲輪IV (G区) 遺構配置図 ($S=1/400$)	12
第7図	内城跡曲輪I 遺構配置図	13
第8図	第1回目 遺構・遺物分布図 ($S=1/50$)	14
第9図	第2回目 遺構・遺物分布図 ($S=1/50$)	15
第10図	東側壁面上土層断面図	16
第11図	西側壁面上土層断面図	17
第12図	南側壁面上土層断面図	18
第13図	北側壁面上土層断面図	19
第14図	出土遺物実測図	21

表目次

第1表	出土遺物観察表	22
第2表	出土遺物観察表	23
第3表	出土遺物観察表	24
第4表	出土遺物観察表	25
第5表	出土遺物観察表	26
第6表	散疊・集石状遺構の接合数・距離一覧	27

写真図版目次

図版 1	内城跡全景（南東から）	30
	第1回完掘状況（真上から）	
図版 2	重機による表土剥ぎ	31
	作業員による遺構検出	
	西側土層観察用トレンチ	
	西側土層観察用トレンチ	
	第1回遺構検出状況	
	第1回遺構掘込み作業	
	第1回遺構掘込み状況	
	第1回遺構掘込み状況	
図版 3	東側土層堆積状況	32
	東側土層堆積状況	
	西側土層堆積状況	
	南側土層堆積状況	
	北側土層堆積状況	
	遺構半裁状況 1	
	遺構半裁状況 2	
	遺構半裁状況 3	
図版 4	第1回遺物出土状況 1	33
	第1回遺物出土状況 2	
	第1回遺物出土状況 3	
	第1回遺物出土状況 4	
	第2回遺物出土状況 1	
	第2回遺物出土状況 2	
	第2回遺物出土状況 3	
	第2回完掘状況	
図版 5	III 3層集石状遺構出土疊 1 (接合)	34
	III 3層集石状遺構出土疊 2 (接合)	
	III 3層集石状遺構出土疊 3 (接合)	
	III 3層集石状遺構出土疊 4 (接合)	
	III 3層集石状遺構出土疊 5 (接合)	
	III 3層集石状遺構出土疊 6 (接合)	
	III 3層集石状遺構出土疊 7 (接合)	
	III 3層集石状遺構出土疊 8 (接合)	
図版 6	II 2層出土遺物 1	35
	II 2層出土遺物 2	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成17年11月21日に旧佐土原町教育委員会へKDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターから無線通信基地局の新設に伴う文化財所在の有無についての照会があった。所在地は、旧佐土原町大字東上那珂字内城16646番。回答として平成17年11月24日に、現在まで確認されている文化財に内城跡（5028番・周知の埋蔵文化財包蔵地）の存在を示し、開発される場合は事前の確認調査を必要とする主旨で回答を行った。その後の調整で、平成17年12月12日から15日の期間において確認調査を実施した。主な堆積層は、鬼界アカホヤ火山灰の2次堆積層やその直下の遺物包含層と小林輕石層からなる。検出遺構は、鬼界アカホヤ火山灰の2次堆積層から溝や柱穴が確認され、同じく溝遺構から中世期の陶磁器類が出土した。この結果を受けて、平成18年2月13日にKDDI株式会社福岡エンジニアリングセンターと宮崎市の間において委託契約が結ばれ、記録保存のための発掘調査を行うことになった。

調査は平成18年2月22日から3月30日までの間実施した。

第2節 調査の組織

内城跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎市教育委員会

（平成17年度）

文化振興課	課長	野田 清孝
	補佐	永井 淳生
文化財係	係長	米良 明信
調査事務	主任	食 松崎 留美
調査員	主査	木村 明史

（平成18年度）

文化振興課	課長	野田 清孝
	補佐	永井 淳生
文化財係	主任	幹 山田 典嗣
調査事務	主任主任	鳥枝 誠
調査員	主査	木村 明史
整理作業員	臨時	[REDACTED]

第3節 遺跡の位置と環境

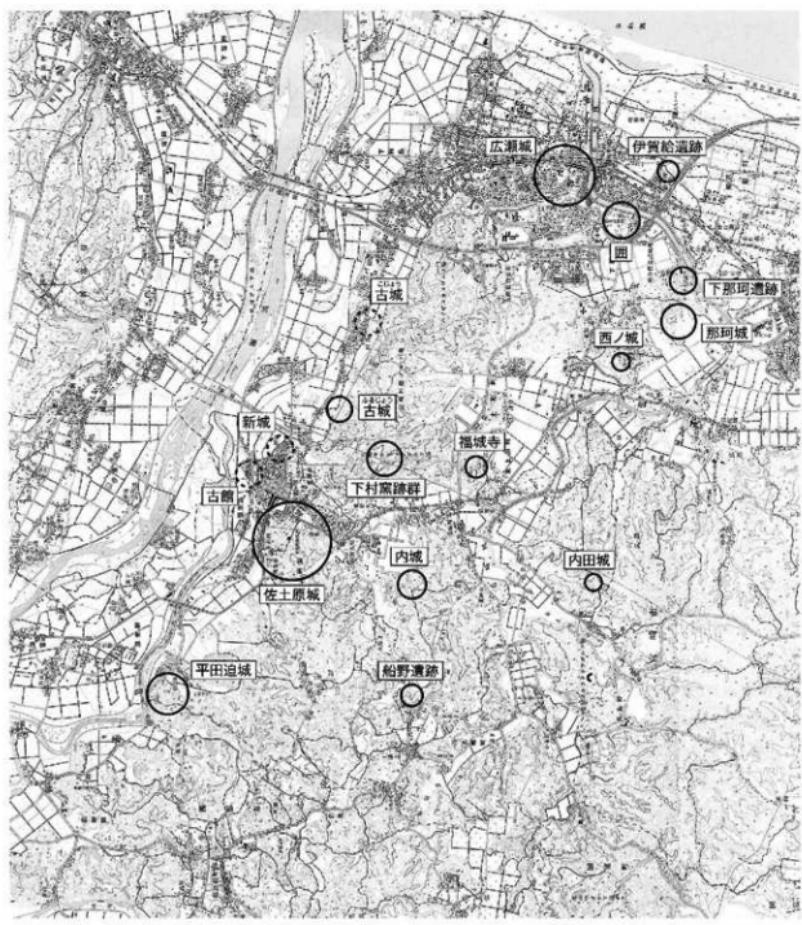
宮崎市佐土原町は、宮崎県の中央部に位置し、九州山地にその源を発し宮崎平野のほぼ中央を流れる一ツ瀬川下流の右岸に所在する。町域を地形で分類すれば日向灘に面して東

側は沖積低地が那珂低地・広瀬海岸低地で形成され、さらに西側に進むと台地や丘陵が年々台地、船野台地、都於郡・仲間原台地、鹿野田・上田島台地と広がるが、全体的には開析で細長く延び縁辺部がしばしば舌状を呈している。縁辺部には、宮ヶ迫、西ヶ迫、小永迫、田淵迫、牛ヶ迫と諺尾に「迫」が付き開析谷に低地が入り込む。内城跡は、船野台地の東端に位置し、海拔絶対高85mで尾根が放射状に張り出す地形である。

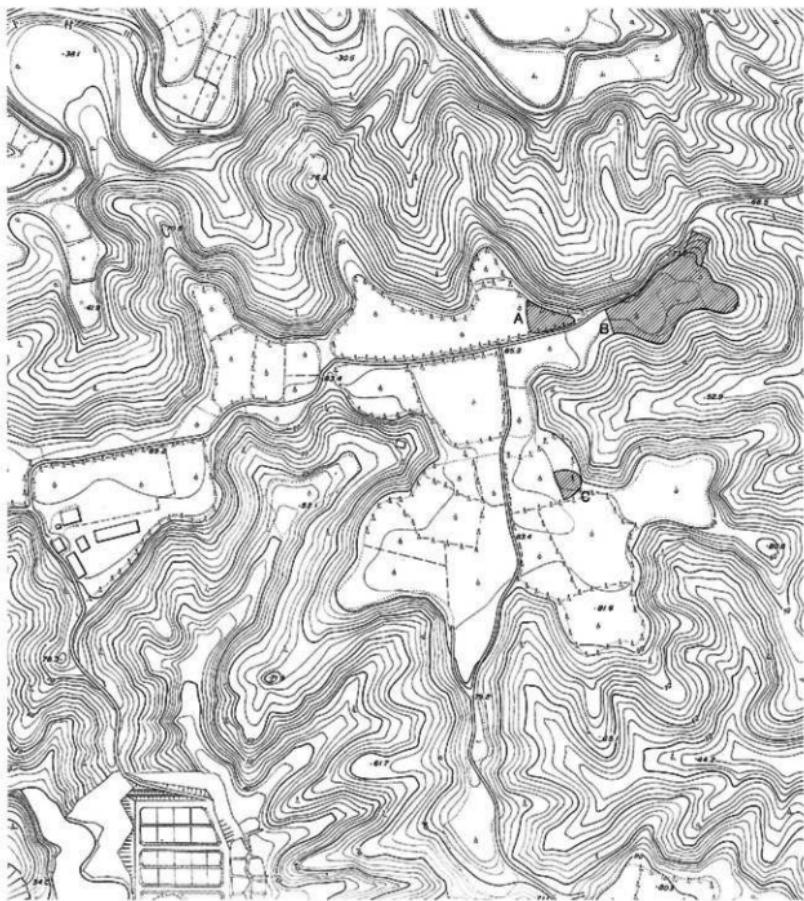
同町域には、先史時代から近世期に至るまで様々な性質の遺跡が多く点在している。まず、先史時代に日を移すと船野台地上に山石器時代、九州の指標となる細石核が確認された船野遺跡、弥生時代には、鏡や飛鳥文の線刻絵画の壺が出土した下那珂遺跡、生産遺跡として広瀬海岸低地の南北に伸びる砂丘列上に水田跡が検出された伊賀給遺跡が挙げられる。

また、水田跡の検出に伴って広域条里制地割の確認を行った。その結果、町域北部を東流する・ツ瀬川の両岸の低位河岸段丘上と町域東部の日向灘沿岸低地の一部の台地状の部分に広域での方格地割が表層条里として存在する可能性が高い。古墳時代になると、線刻壁画を刻んだ横穴が発見された土器田横穴群が見られるようになる。奈良・平安期では、佐土原丘陵西側に須恵器製の器や瓦が出土し、瓦陶兼業窯である下村窯跡群は、当時の日向国分寺や日向国府推定地に供給した南九州最大の窯業遺跡といえる。

次に、宮崎市佐土原町内の中世期から近世期かけての城館跡について触れていく。佐土原町内の城館調査は、第1期の宮崎県教育委員会主催による平成5年度から実施した中近世城館跡緊急分布調査を始めとする。第2期は、佐土原町教育委員会で行われた平成13年度から平成16年度の間の佐土原町内城館の縄張り図作成に分かれる。第1期の調査において、今回発掘調査を実施した内城跡を含めて13箇所の城館が確認されている。その城館群の中心をなす城郭は、佐土原城跡で内城跡を南側の丘陵から見据える位置にある。当城は、戦国末期に日向を手中に収めた伊東氏の都於郡城（西都市）と並んで支配の拠点の役割を果たしていた。縄張りの形態は、丘陵を用いた馬蹄形の要に本丸をさらに尾根伝いのルートで曲輪を2箇所設けている。馬蹄形の丘陵を塞ぐように東側に宝塔山を擁し、中の空間に二の丸や城下、あるいは街道が通り全体として自然空間を巧みに活用した構図となっている。当城は、山城中に唯一・石垣の天守台があり、しかもその石垣が破却されており金箔の鰐瓦・桐紋鬼瓦・桃実紋瓦が出土した。現存する天守台では、日本最南端である。それぞれの城郭の立地の大半が台地から派生する尾根の先端に位置する。佐土原城、平田追城は、三財川に面して仲間原の台地の先端に、同じく久峰の台地から派生する尾根上に古城、福城寺が、下村川に面した小台地上に那珂城、西ノ城が立地する。・ツ瀬川に沿って古城、新城、平城、古館があったと推定されている。石崎川の河口付近には、明治の初めに築かれた広瀬城が築城途上と伝えられている。またこれらの城館は、街道や川沿に面して点在しており当時の地域支配や交通を考慮した結果と思われる。特に佐土原城の城下には、飫肥街道・米良街道・薩摩街道など主な官道の通過地点としての役割も果たしていた。また明治2年（1869）広瀬城転城後の佐土原城下は、・ツ瀬川沿いの日向灘に開口した福島港が明治期から昭和初期に至るまで商業の町として栄えさせる大きな原動力となっていた。



第1図 内城跡の位置と周辺の主な遺跡



A:旧佐土原町教育委員会調査区域
B:宮崎県埋蔵文化財センター調査区域
C:宮崎市教育委員会調査区域

第2図 内城跡周辺地形図及び調査区域

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経緯

確認調査は、平成17年12月12日から15日にかけて実施した。調査対象面積は約280m²で、対象場所は宮崎市佐土原町東上那珂内城16646番地。調査手順は、対象地を十字に1m幅で試掘溝を設定して掘り込んだ。その結果、堆積層は鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層及び小林軽石層・二次堆積層・小林軽石で形成される。発掘調査は、鬼界アカホヤ火山灰・二次堆積層と直下の遺物とその下層の小林軽石層を対象とした。遺構は鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層から溝・柱等が検出され、溝遺構からは中世期の陶磁器が出土した。

平成18年2月22日に小型重機による表土剥ぎの作業を実施した。現地は、標高80m付近で台地の縁辺部に位置し、西側は台地の中央部、東側は急峻な傾斜を用いて天然要塞とした地形である。調査前の現況は、大半が杉林と畠であった。そこでチエンソーラで調査部分の杉林を伐採してから小型重機を導入した。表土は腐植土を多く含む褐色系の堆積土である。その下層から鬼界アカホヤ火山灰の二次が、次の下層からは遺物包含層を挟んで小林軽石の二次が堆積している。表土剥ぎの作業は、鬼界アカホヤ火山灰の二次の頂部面の検出を目処に推し進めた。すると調査区中央を境に、北側は鬼界アカホヤ火山灰が鮮明に検出されたが、反面南側は鬼界アカホヤ堆積土ではなく部分的に小林軽石の二次上に鬼界アカホヤが残存している。全体の表土を除去すると北側から南側に向かって勾配している。この段階で重機による作業は一旦終了して、手作業による遺構の検出を行った。鬼界アカホヤを徐々に削っていくと褐色系の堆積土が所々に形を成して浮かび上がってくる。南側の小林軽石土上にも同様な状況が一部視覚的に現れてくる。全体的に検出された後に、遺構毎に東西方向に半裁設定をして掘り込み作業を行った。また西南隅には、礫の集石がまとまって出土した。掘り込み作業後は、遺構への堆積状況を記録し、残りの堆積土を除去した。これで第1回目の発掘調査作業を完了した。

次に、南北半分は鉄塔の基盤が包含層にかからないので掘り下げない。しかし北半分は、鉄塔の基盤が下層を崩壊するので事前に西北隅の西壁に沿って南北方向に試掘溝を入れた。そこで堆積状況は鬼界アカホヤ二次堆積層及び遺物包含層の下層は小林軽石の二次、さらにアワオコシ、イワオコシと続く。そこで下層に遺物が含まれている可能性があることからアワオコシの頂部面まで検出作業を行う。まず遺構が掘り込まれた鬼界アカホヤ2次堆積層を小型重機で剥ぎ取り、その後手作業で順次小林軽石二次を掘り下げていった。暫くの間、遺物は散発的にしか出土しなかったがアワオコシの手前で礫の塊が2m四方で確認された。作業をさらに進めたが、その後は遺構・遺物の検出にはいたらなかった。当初の予定通りアワオコシの頂部面で掘り込み作業を終了した。

第2節 基本層序

内城跡の基本層序を第3図に示した。また参考までに従来、調査された基本層序を第4図に掲げた。

層序は標高86m付近に第I層から第V層までの堆積で形成され、まず第I層は表土で現況は畑の耕作土として用いられている。第II1層は、鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積土でこの層から柱穴や性格不明土坑が、また陶磁器や土師器が出土しており内城跡の基本層となっていたと推測される。第II2層は、遺物包含層で縄文土器が確認されている。第III層は小林軽石の二次堆積層からなり疊や凹石器が出土している。第IV1層以下のアワオコシと第V層イワオコシからは、遺物等の出土は確認できなかった。南半分は、第I層から第V層の間で第II1層と第II2層については人為的か、あるいは自然的な行為によってほとんど堆積していない状況である。

それでは、ここで以前の内城跡調査での基本層序を掲げ相対的に位置づけたい。宮崎県埋蔵文化財センターでの事例は、標高84mでは上位から耕作土、鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層、縄文時代早期の遺物包含層、小林軽石の風成層、アワオコシ、イワオコシと報告されている。次に旧佐土原町教育委員会の事例では、標高85mで上位から耕作土、鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積土、縄文時代の遺物包含層、小林軽石の二次堆積層、アワオコシ、イワオコシと続く。3者ともほぼ同レベルの標高に位置し、キーとなる文化層は鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層と遺物包含層の2層が確認されている。相互に出土内容は当時の環境作用で異なっており、宮崎県埋蔵文化財センターの発掘調査地域の遺物包含層からは縄文早期の出土であったが他地域は異なる時期の遺物が混ざっている。特に内城跡の城郭としての機能を果たした層は、鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層でここから掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑などが検出された。小林軽石の風成層については、宮崎市教育委員会の発掘調査地域から旧石器が出土している。

I 表土
II 1 黄褐色土
II 2 褐色土
III 1 褐色土
III 2 暗褐色土
III 3 暗褐色土
IV 1 アワオコシ
IV 2
V イワオコシ

耕作土
鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積土、普請関連の遺構検出面

小林軽石の二次堆積土、

散礫・集石状遺構、旧石器の包含層

二次堆積土

一次堆積土

第3図 内城跡基本層序模式図

I 表土
II 黒褐色土
III 黄褐色土
IV 褐色土
V 褐色土
VI 暗褐色土
VII 黒色土
VIII アワオコシ
IX にぶい黄褐色土
X イワオコシ
XI 黄褐色土
XII にぶい黄橙色土

耕作土
旧耕作土
鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積土
縄文時代早期の遺物包含層
小林軽石の風成層
始良Tn火山灰(AT)がわずかに混在
一次堆積土
粘質土(オコシローム)
一次堆積土
粘質土(オコシローム)
阿蘇4の風成層

I 表土
II 黒褐色土
III 明黄褐色
IV 黒色
V 暗赤褐色
VI 黄色
VII 黒色

耕作土
鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層
弥生時代～縄文時代の遺物包含層
小林軽石の二次堆積層
小林軽石の一次堆積層

（宮崎県埋蔵文化財センター調査資料から）

（旧佐土原町教育委員会調査資料から）

第4図 従来、調査された内城跡の基本層序模式図

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 従来の調査記録

内城跡については、過去にすでに2度調査が実施されている。最初に宮崎県埋蔵文化財センターが平成10年11月16日から平成11年11月2日まで一般国道219号道路改築事業（春田バイパス）に伴う事前調査として着手した。その途中から平成11年4月16日から5月31日にかけて旧佐土原町教育委員会においてエヌ・ティ・ティ・ドコモ九州による携帯電話無線基地局建設の事前調査を行った。調査成果は、まず宮崎県埋蔵文化財センターは、主な時代は中世・古代・縄文時代、主な遺構は（中世）掘立柱建物跡、溝状遺構、（古代）竪穴住居跡、（縄文時代）集石遺構、炉穴跡、土坑、主な遺物は（中世）貿易陶磁器、国内産陶磁器、上師器、錢貨、（古代）黒色土器、甕、（縄文時代）貝殻文円筒形土器、平滑式土器、押型文土器、打製石斧、局部磨製石斧、石鎌、楔形石器、特記事項は溝状遺構を3条確認、皇宗通寶、熙寧元寶、元豐通寶など、計72枚の錢貨が出土。縄文時代早期の集石遺構14基と炉穴22基を検出した。旧佐土原町教育委員会は、主な時代は、中世・古代・縄文時代、主な遺構は（中世）柱穴、集石遺構、溝状遺構、主な遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器、陶器、剣片、先頭状石器、円形搔器、石鎌、石斧、特記事項は溝状遺構が曲輪東端に東西方向に検出された。

第2節 城郭関連遺構

1 内城跡の縄張り

内城跡は、船野台地の東側先端部の台地上の平坦部に展開している。標高は85m前後で尾根が放射状に張り出しており俯瞰すれば蜻足状の景観をイメージする。城郭の特性は、城郭史においては、「辺境型」、「九州館屋敷型」、「群郭式城郭」と呼ばれ複数の曲輪が並立的に連結した構成をなしている。地形上の分類として①丘陵立地型（比較的細長い尾根筋を最大限に利用し、曲輪は鎖を連ねて構成。丘陵の要所を掘りきることで防御性を高める。例：佐土原城跡、新城跡、宮崎城）、②台地立地型（台地の角部や突出部に占地し、大規模な堀で区画された独立性の高い曲輪が群れをなす。例：都於郡城、穗北城）の2タイプに分けられる。内城跡は、②の台地立地型に属し、中世の南九州の特徴を有する城郭である。

それではこれから内城跡の各縄張りを出土遺構と絡めて縄張図（第5図）に沿って概観していく。

内城跡の縄張りの中心部を形作る曲輪Iは、北に曲輪IIを、東側に曲輪IVを、西側に曲輪IIIを並列して構成されている。規模は、南北約150m、東西約230mである。曲輪Iと曲輪IIの間に堀切a、曲輪Iと曲輪IVの間に堀切c、曲輪Iと曲輪IIIの間に堀切bが設けられ主要曲輪を独立させる機能を果たしている。曲輪IIIから西側の尾根は、船野台地上に広く展開し、敵はこの尾根に沿って侵入してくるので堀切gによって防御する。またその他他の曲輪IIIの尾根突出部は、堀切h、平場iをつくり敵に備える。曲輪IVは、東側の尾根突

出部に堀切 j と k を設けている。曲輪 I から突出する尾根は、堀切 d、e、f と切断している。かつて堀切 a には土塁があり、耕作時に崩して埋めたので現在、西側にしか堀切は残っていない。この土塁の存在が曲輪 I を曲輪 II に対して優位にし、本丸として位置づけられる要因となっている。曲輪 II は、内城内で最大の曲輪で南北約180m、東西約320mを有する。しかし曲輪 I に比べて尾根各所に堀切を設けていない。

総体的にこの縄張りから内城跡をどのような城として捉えられるのだろうか。

各曲輪は、台地上に直線的な堀切を入れ分割し曲輪間は並立した関係となっている。曲輪 I、III、IV の北側に向かう尾根は丁寧に堀切が普請されている。対して南側に続く尾根は、ほとんど普請の痕跡が見られない。以上から内城跡は、北への防御は強固だが南は極めて手薄の感が否めない。北への防御は、同じく北へ1km離れた佐土原城跡の守りを意識したつくり、また南側の曲輪 II の大規模で手薄な防御は、兵站基地としての可能性も考えられる。

2 遺構

(1) 柱穴跡

鬼界アカホヤの2次堆積層面を検出していくと上位堆積層が混入した痕跡が調査地の平面の北側面に限って面的に明瞭になっていく。そこから検出された19の柱穴は、平均幅30cmから50cmで深さは平均30cmを測る。一箇所、北寄りに南北方向へ約4mの間で6柱穴と3柱穴が並列し、その他は、不規則に点在する。変わって、南側平面では小林軽石二次堆積層から3柱穴が出土した。遺構の埋土は、ほぼ同一の褐色土が堆積している。

(2) 普請跡

調査地の南側半分は、耕作土層下の鬼界アカホヤ2次堆積層が部分的に残存してその他は小林軽石二次堆積土が全面的に露出する。この堆積層は、内城跡の普請に伴う溝でその後土層断面観察から伺える客土の痕から埋め戻したのではないかと推測される。

(3) 性格不明土坑

鬼界アカホヤの2次堆積層から主に調査地の北側平面に渡って平均幅80cm、深さ約60cmの用途不明の土坑が24基検出された。柱穴と同じく南北方向へ3並列（西から3基、6基、6基）構成である。また南側平面では、小林軽石二次堆積層から南東隅側に4基出土している。遺構の埋土は、柱穴跡と同じくほぼ同一の褐色土が堆積している。

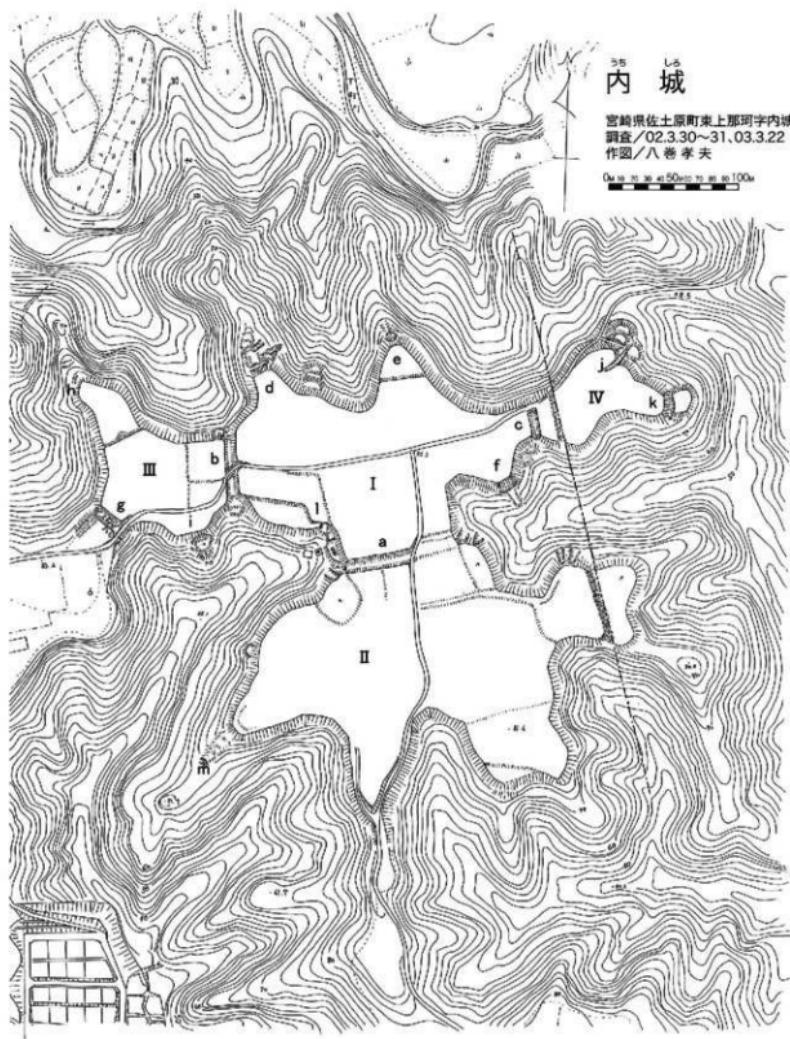
第3節 集石状遺構

集石状遺構は、小林軽石の二次堆積層から西南隅に一箇所、中央部に一箇所の計2箇所ほど確認された。同様に宮崎県埋蔵文化財センター調査分では、鬼界アカホヤ火山灰2次堆積層直下の縄文時代早期の遺物包含層から集石遺構が14基出土した。出土状況から以下の分類を試みている。礫の密集度からⅠ類 磨の密度が特に顕著なもの、Ⅱ類 磨が密集するもの、Ⅲ類 磨がやや散在もしくは散在するもの、土坑の有無からa類 土坑をもつものの、b類 土坑をもたないもの、そこでは集石遺構14基のうち13基が土坑を有していない。また土坑底面の配石は、1基を除いて施されていない。集石状況の観察結果から3点の特徴を挙げている。①構成礫の大半が長軸10cmの並鉛礫と亜角礫である。②長軸が20cmを越える比較的大きな礫が混在する遺構は7基しかなく、その混在状況も1つの遺構で平均約1.7個と低い。③構成礫の集石密度も全体的にはそれほど高いとはいえない。

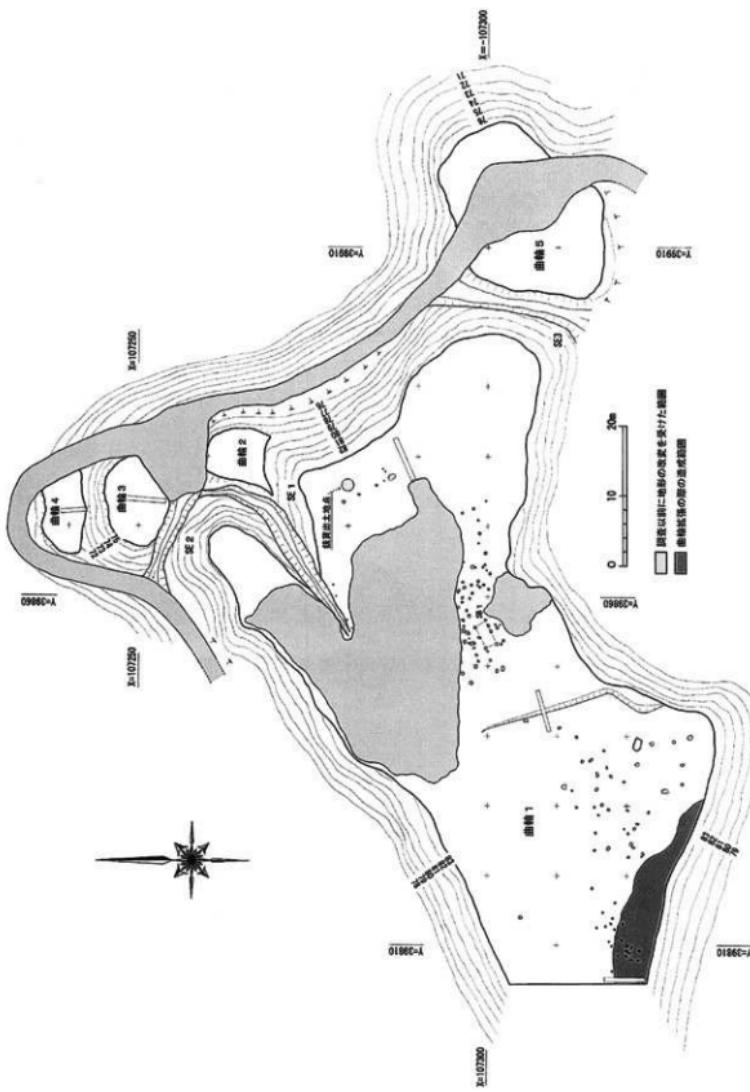
以上の事例と比較するに当たってよりよい成果を得るために以下の整理を進めた。礫が集石している部分と散礫状況に着目し、整理方法として割れた礫に糊を用いて接合する。後で割れ面を観察できるように接着剤は使用しない。接合手順は、①集石遺構、②散礫間、③散礫・集石遺構間の順で行う。次に接合図を作成し、石材別に分け、接合関係を図示する。さらに礫の石材・重量の情報を記録する。以上の整理した資料から当時の環境との関わりや作業投下量を引き出して集石遺構、遺物分布を重ね合わせることで散礫の状況や成因の背景を推す手がかりとなる。

この作業を通して、以下礫間の距離は最小0.65mから最大2.90mの間を移動し、その内、0.5~1mの距離間が最も接合率が高く、距離が離れるに従い接合率が低くなっている。また礫のほとんどが破損し、赤く焼けて、礫の下面は土坑の痕跡はないという状況(第6表)であった。それを踏まえて当初集石状遺構は前例の宮崎県埋蔵文化財センター調査資料と同様に人為的に使用されていたが使用を遺棄し、その後何らかの自然的作用を受けたと考えられる。人為的に集石の礫を破碎し持ち運んだとする廃棄的行為は、接合する礫間の距離がさらに遠くからまとまって確認される状況が想定される。集石状遺構は2基出しし、共にⅢ3層からの出土であり出土状況も類似している。

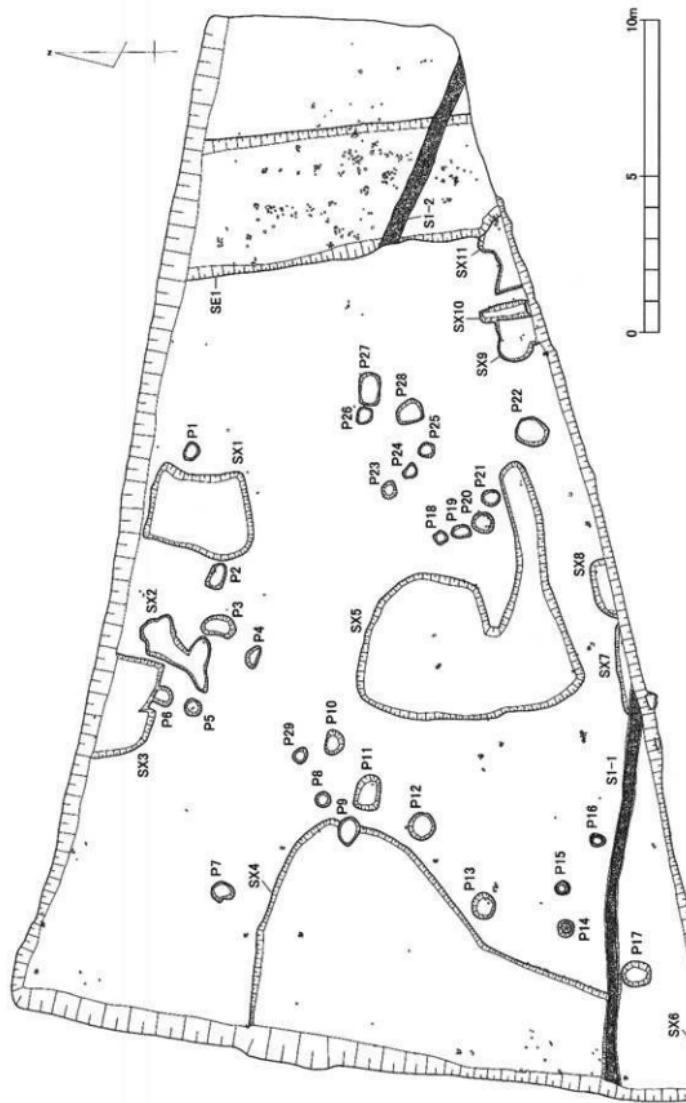
のことから2基は、小林軽石の二次堆積からの出土を勘案すると集石状遺構が本来の機能を果たしていた段階から現況は自然的作用による移動の結果と推測される。



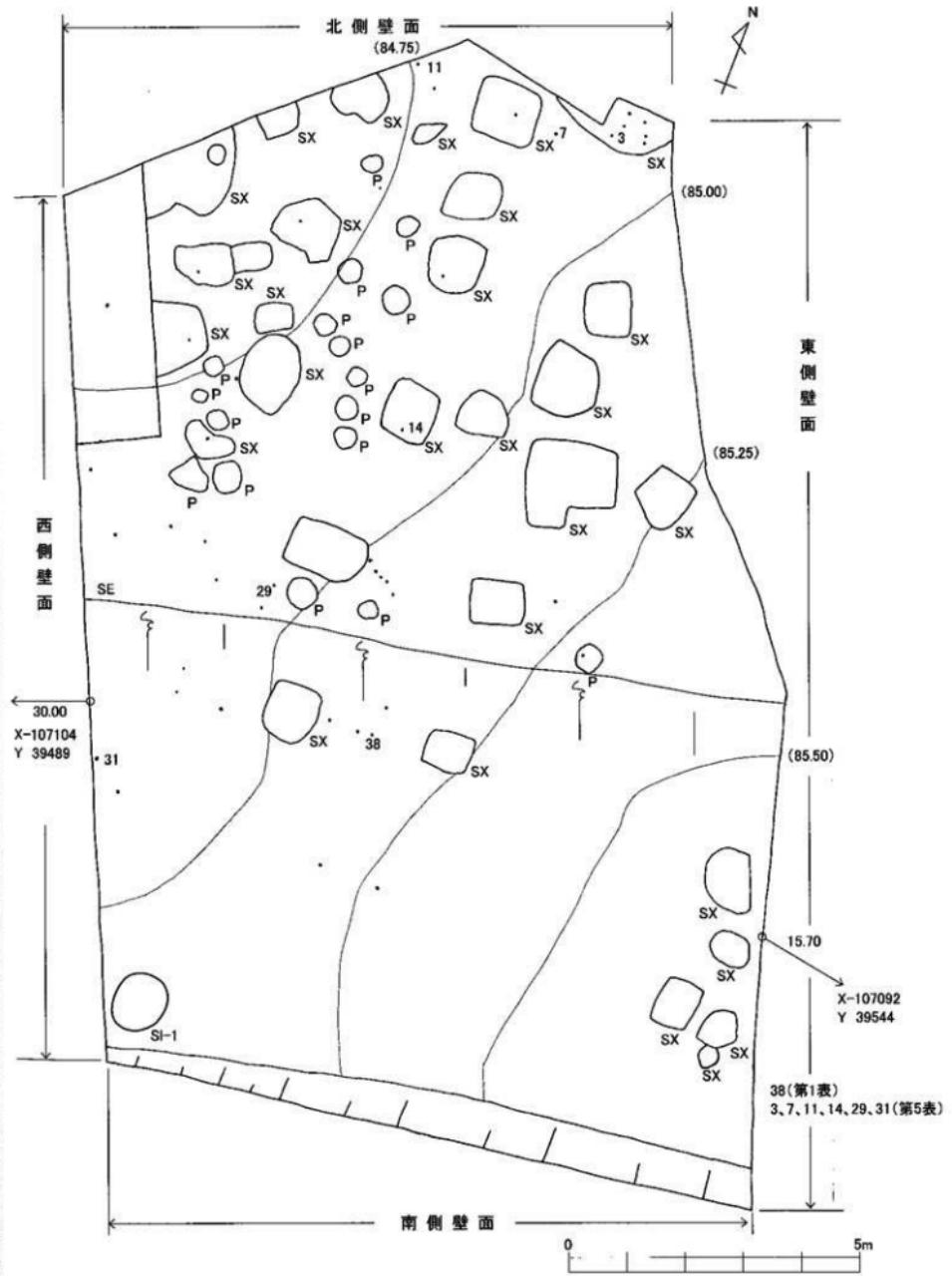
第5図 内城跡縦張図



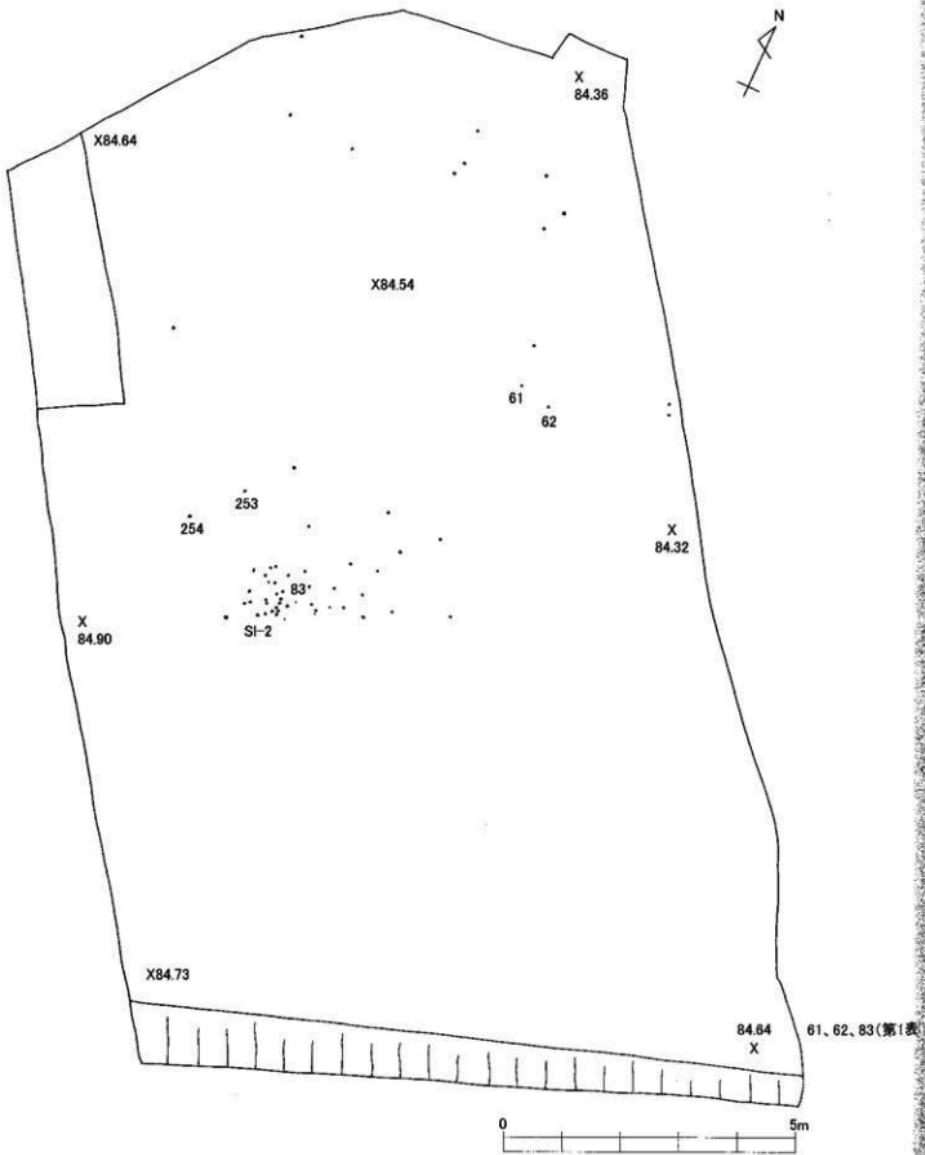
第6図 内域跡曲輪IV（G区）遺構配置図（S=1/400）



第7回 内閣申報圖

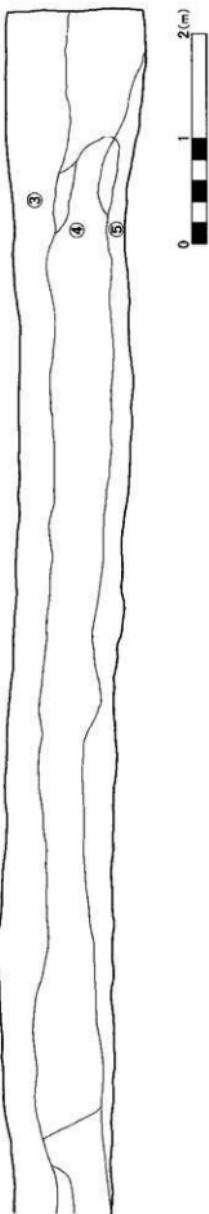


第8図 第1回目 遺構・遺物分布図 (S=1/50)

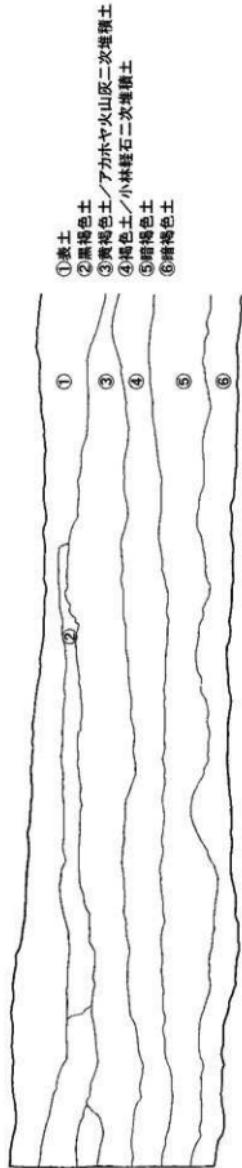


第9図 第2回目 遺構・遺物分布図 (S=1/50)

第10図 東側壁面土壌断面図

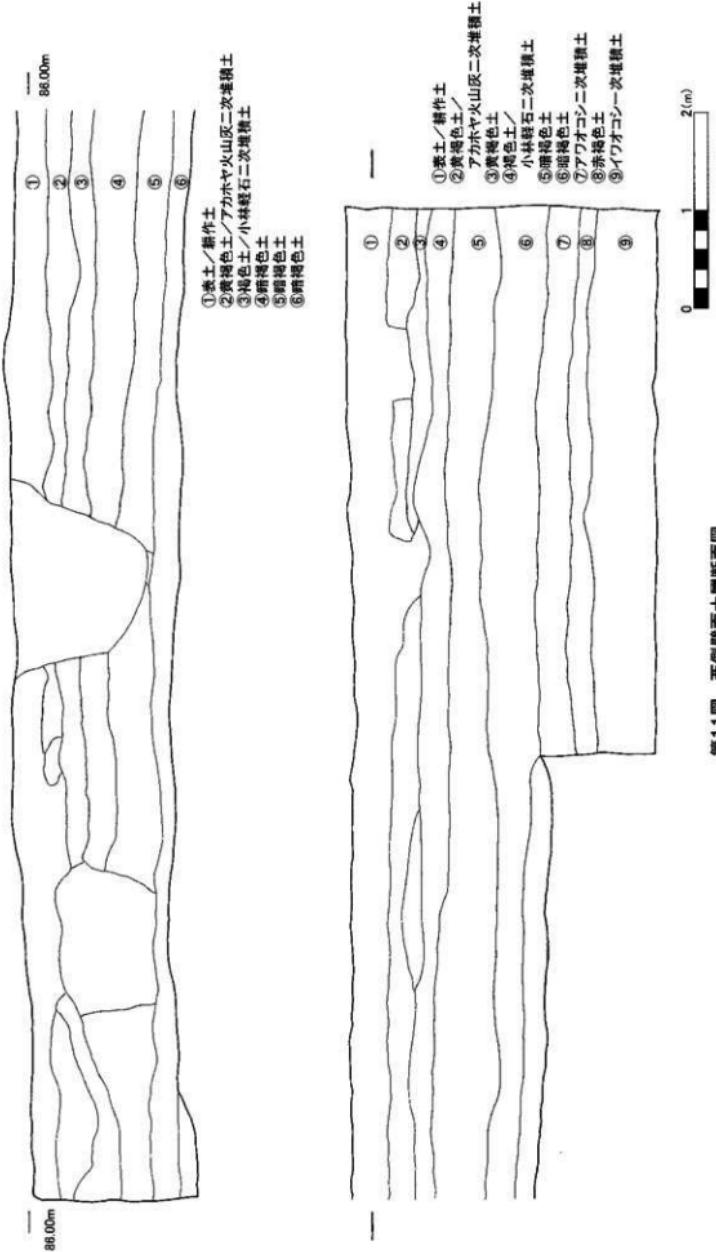


— 86.00m —



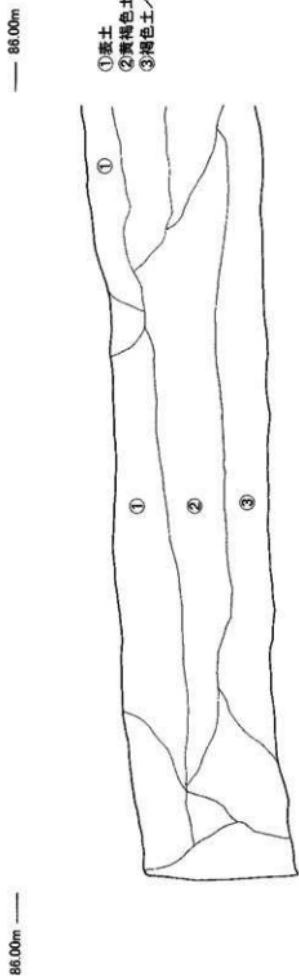
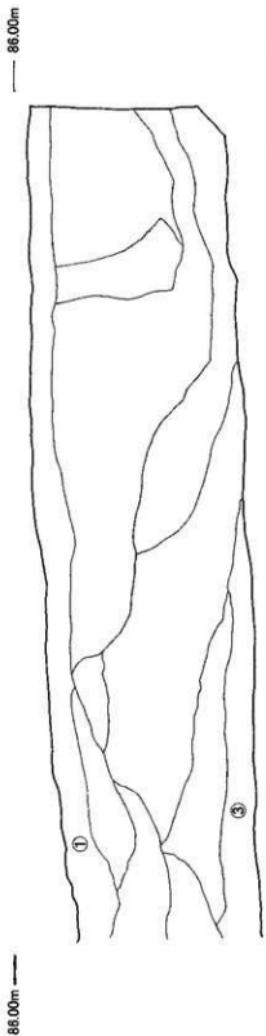
— 86.00m —

第11図 西側壁面土壌断面図

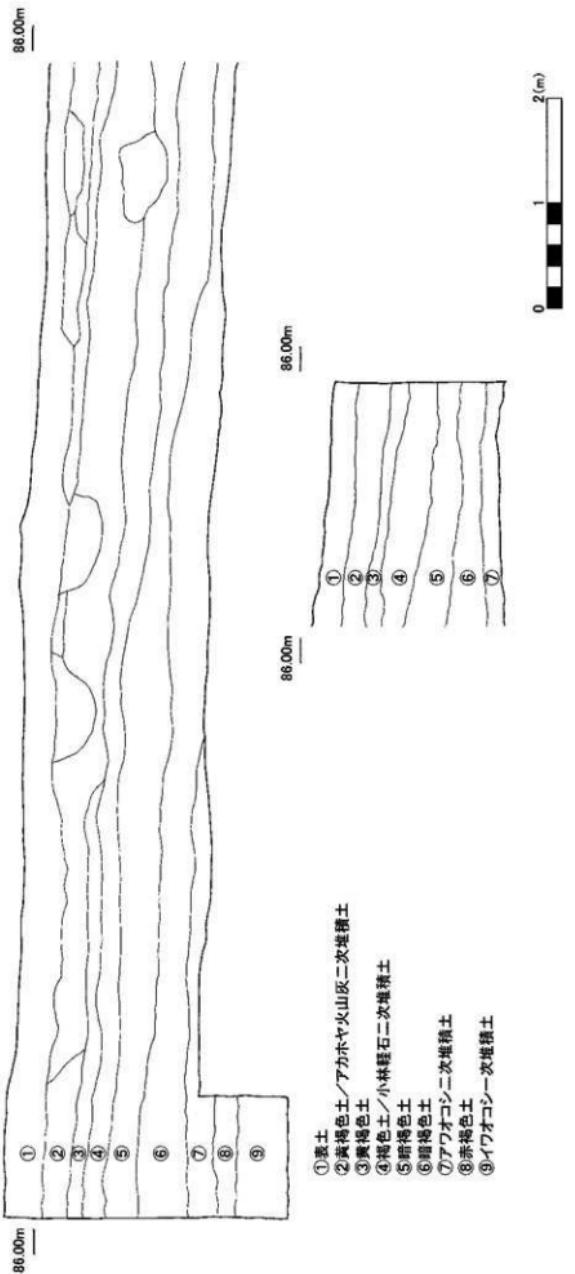


— 86.00m —
0 2(m)

第12図 南側壁面土壌断面図



第13図 北側壁面土壌断面図



第4節 出土遺物

1 弥生土器 (図版6:1、2) (第14図1、2) (第5表2、3)

1 弥生土器の胴部で、工具による凹線紋と横ナデが施されている。

2 弥生土器の胴部の一部で工具を胴部に押して施行している。

2 旧石器 (図版6:3、4) (第4表253、254)

3 剥片の周縁を両縁に渡って刃部形成のための剥離を細部に行っている。

4 石核から剥離した剥片で、その先端部に剥離の主要痕が観られ左側に調整剥離が施されている。

3 接合資料

接合資料1 (第1表:38+83)

III 3層出土位置 (第8図・第9図)、接合写真 (図版5:5)

接合資料2 (第1表:61+62)

III 3層出土位置 (第9図)、接合写真 (図版5:3)



1



2

第14図 出土遺物実測図

第1表 出土遺物観察表

No	層	No	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(kg)	器種	観察所見
1	III3	38	砂岩	20.3	11.6	5	1.5	礫	38+83(図版5・5)
2	III3	39	砂岩	9	6.4	2.2	0.2	礫	
3	III3	41	砂岩	19.1	15.2	7.6	3.25	礫	
4	III3	42	砂岩	11.5	5	4.1	0.3	礫	
5	III3	43	砂岩	10.8	7.1	4	0.3	礫	
6	III3	44	砂岩	23.5	15	8.8	3.69	礫	
7	III3	45	砂岩	9.8	7.6	3.6	0.3	礫	
8	III3	46	砂岩	6	6.5	3.1	0.2	礫	
9	III3	47	砂岩	7.8	4.8	2.4	0.15	礫	
10	III3	48	砂岩	6.3	4.4	2	0.05	礫	
11	III3	49	砂岩	8.1	7.4	4	0.25	礫	
12	III3	50	砂岩	15	7.5	4.8	0.7	礫	
13	III3	51	砂岩	11.3	6.1	3.3	0.3	礫	
14	III3	52	砂岩	12.8	5	6.3	0.4	礫	
15	III3	53	砂岩	6.2	11.5	5.1	0.5	礫	
16	III3	54	砂岩	5.8	4.8	2.6	0.1	礫	
17	III3	55	砂岩	9.2	6.3	1	0.1	礫	
18	III3	56	流紋岩	4.2	1.2	0.7	0.5	測片	
19	III3	58	砂岩	4	5.2	3.1	0.1	礫	
20	III3	59	砂岩	8.6	5.8	4.6	0.3	礫	59+136
21	III3	60	砂岩	13.5	4.3	4.4	0.3	礫	
22	III3	61	砂岩	16.6	10	7.8	1.4	礫	61+62(図版5・3)
23	III3	62	砂岩	—	—	—	—	礫	61+62(図版5・3)
24	III3	63	砂岩	11	10	1.7	0.2	礫	63+106
25	III3	64	砂岩	3.1	5.2	3.4	0.1	礫	64+128
26	III3	65	砂岩	12.5	13.4	5.6	1.05	礫	65+169+172(図版5・7)
27	III3	66	砂岩	7.4	5.1	2.7	0.15	礫	66+105
28	III3	67	砂岩	6.7	5.9	1.5	0.1	礫	
29	III3	68	砂岩	6.7	6	3.5	0.15	礫	68+69+76
30	III3	69	砂岩	5.4	2.5	3	0.05	礫	68+69+76
31	III3	70	砂岩	3.8	3	1.3	0.015	礫	
32	III3	71	砂岩	12.2	10.8	4.7	0.9	礫	
33	III3	72	砂岩	6.5	5	2.8	0.1	礫	
34	III3	74	砂岩	5.9	7.8	5.9	0.2	礫	
35	III3	75	砂岩	16	10.7	10.6	1.6	礫	
36	III3	76	砂岩	—	—	—	—	礫	68+69+76
37	III3	77	砂岩	7.3	5.9	2.1	0.1	礫	77+78
38	III3	78	砂岩	—	—	—	—	礫	77+78
39	III3	79	砂岩	9.7	9.7	3.6	0.49	礫	
40	III3	80	砂岩	7.5	7.2	3.3	0.25	礫	
41	III3	81	砂岩	3.4	2.4	0.9	0.01	礫	
42	III3	82	砂岩	1.8	1.5	0.6	0.0025	礫	
43	III3	83	砂岩	—	—	—	—	礫	83+38
44	III3	84	砂岩	2.1	2	0.7	0.003	礫	
45	III3	85	砂岩	3.7	1.7	0.9	0.01	礫	
46	III3	86	砂岩	7.1	5.9	3.3	0.15	礫	
47	III3	87	砂岩	8.7	7	4.3	0.35	礫	
48	III3	88	砂岩	18.8	13.7	7.6	2.8	礫	
49	III3	89	砂岩	4	4.8	2.6	0.05	礫	
50	III3	90	砂岩	4	2.2	0.8	0.0175	礫	
51	III3	91	砂岩	1.7	1.8	0.8	0.0025	礫	
52	III3	92	砂岩	2.1	1	0.9	0.0025	礫	
53	III3	93	砂岩	6	8	4.4	0.2	礫	
54	III3	94	砂岩	14.9	5.6	7.3	0.8	礫	94+95+102+166

第2表 出土遺物観察表

No	層	No	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(kg)	器種	観察所見
55	III3	95	砂岩	—	—	—	—	礫	94+95+102+166
56	III3	96	砂岩	5.2	6.8	3	0.15	礫	
57	III3	97	砂岩	9	6.3	1.3	0.1	礫	
58	III3	98	砂岩	3.9	2.9	0.7	0.01	礫	
59	III3	99	砂岩	2.3	1.3	1.4	0.003	礫	
60	III3	100	砂岩	4.5	4.9	1	0.022	礫	
61	III3	101	砂岩	5.7	4.8	1.7	0.05	礫	
62	III3	102	砂岩	—	—	—	—	礫	94+95+102+166
63	III3	103	砂岩	2.6	2.7	1	0.0075	礫	
64	III3	104	砂岩	3	3	1.2	0.015	礫	
65	III3	105	砂岩	6.7	6	3.5	0.15	礫	105+66
66	III3	106	砂岩	—	—	—	—	礫	63+106
67	III3	107	砂岩	3.4	2.7	1	0.01	礫	
68	III3	108	砂岩	10.3	6.3	3	0.25	礫	108+116
69	III3	109	砂岩	10.6	5.9	2.9	0.12	礫	
70	III3	110	砂岩	8.1	7	3.8	0.2	礫	
71	III3	111	砂岩	8.1	5.8	3.4	0.2	礫	111+112
72	III3	112	砂岩	—	—	—	—	礫	111+112
73	III3	113	砂岩	11.1	9.6	3.5	5.0	礫	
74	III3	114	砂岩	—	—	—	—	礫	114+115
75	III3	115	砂岩	—	—	—	—	礫	114+115
76	III3	116	砂岩	—	—	—	—	礫	108+116
77	III3	117	砂岩	6.8	6.1	3.8	0.19	礫	
78	III3	118	砂岩	5.3	5.4	1.3	0.05	礫	
79	III3	119	砂岩	4.3	4.3	0.7	0.025	礫	
80	III3	120	砂岩	10.3	8.0	6.6	0.55	礫	120+130
81	III3	121	砂岩	9.2	6.4	3	0.3	礫	
82	III3	122	砂岩	6.4	5.1	2.0	0.08	礫	122+127
83	III3	123	砂岩	7.8	6.6	3.3	0.12	礫	
84	III3	124	流紋岩	3.7	1.4	0.9	0.7	剥片	
85	III3	127	砂岩	—	—	—	—	礫	122+127
86	III3	128	砂岩	—	—	—	—	礫	64+128
87	III3	129	砂岩	13.4	7.9	5	0.65	礫	129+168+170+171
88	III3	130	砂岩	—	—	—	—	礫	120+130
89	III3	131	砂岩	11	5.5	6.3	0.35	礫	131+156
90	III3	132	砂岩	13	11	5.3	0.9	礫	132+143+144+145+146+147+148
91	III3	133	砂岩	5.5	5.5	2.2	0.05	礫	
92	III3	134	砂岩	11.5	7	4.3	0.4	礫	
93	III3	135	砂岩	15.1	8.3	6.2	1.3	礫	135+158 (図版5・4)
94	III3	136	砂岩	—	—	—	—	礫	59+136
95	III3	137	砂岩	7.8	5.9	4.4	0.25	礫	
96	III3	138	砂岩	10.5	6.8	4	0.35	礫	
97	III3	139	砂岩	11	7.7	3.1	0.39	礫	139+140
98	III3	140	砂岩	—	—	—	—	礫	139+140
99	III3	141	砂岩	10.6	4.6	5.4	0.4	礫	141+142+154+165 (図版5・6)
100	III3	142	砂岩	—	—	—	—	礫	141+142+154+165 (図版5・6)
101	III3	143	砂岩	—	—	—	—	礫	132+143+144+145+146+147+148
102	III3	144	砂岩	—	—	—	—	礫	132+143+144+145+146+147+148
103	III3	145	砂岩	—	—	—	—	礫	132+143+144+145+146+147+148
104	III3	146	砂岩	—	—	—	—	礫	132+143+144+145+146+147+148
105	III3	147	砂岩	—	—	—	—	礫	132+143+144+145+146+147+148
106	III3	148	砂岩	—	—	—	—	礫	132+143+144+145+146+147+148
107	III3	150	砂岩	14.5	10.9	9.3	1.3	礫	150+151+152+153+163 (図版5・2)
108	III3	151	砂岩	—	—	—	—	礫	150+151+152+153+163 (図版5・2)
109	III3	152	砂岩	—	—	—	—	礫	150+151+152+153+163 (図版5・2)

第3表 出土遺物観察表

No	層	No	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	器種	観察所見
110	III3	153	砂岩	—	—	—	—	礫	150+151+152+153+163 (図版5・2)
111	III3	154	砂岩	—	—	—	—	礫	141+142+154+165 (図版5・6)
112	III3	155	砂岩	9.2	6.3	2.2	0.19	礫	
113	III3	156	砂岩	—	—	—	—	礫	131+156
114	III3	157	砂岩	5.3	5	2.3	0.1	礫	
115	III3	158	砂岩	—	—	—	—	礫	
116	III3	160	砂岩	5.2	2.3	2.1	0.03	礫	
117	III3	161	砂岩	4.6	3.6	3.2	0.05	礫	
118	III3	162	砂岩	15.2	9.8	3	0.5	礫	
119	III3	163	砂岩	—	—	—	—	礫	150+151+152+153+163 (図版5・2)
120	III3	164	砂岩	5	4	5	0.1	礫	
121	III3	165	砂岩	—	—	—	—	礫	141+142+154+165 (図版5・6)
122	III3	166	砂岩	—	—	—	—	礫	94+95+102+166
123	III3	167	砂岩	6.7	7.8	1.6	0.15	礫	
124	III3	168	砂岩	—	—	—	—	礫	129+168+170+171
125	III3	169	砂岩	—	—	—	—	礫	65+169+172 (図版5・7)
126	III3	170	砂岩	—	—	—	—	礫	129+168+170+171
127	III3	171	砂岩	—	—	—	—	礫	129+168+170+171
128	III3	172	砂岩	—	—	—	—	礫	65+169+172 (図版5・7)
129	III3	173	砂岩	4.4	3.1	1.3	0.02	礫	
130	III3	174	砂岩	8.9	4.7	2.4	0.1	礫	174+175
131	III3	174	砂岩	8.9	4.7	2.4	0.1	礫	174+175
132	III3	176	砂岩	3.9	3.3	1	0.0125	礫	
133	III3	177	砂岩	8.3	6.5	2.3	0.15	礫	
134	III3	178	砂岩	4.4	2.2	0.9	0.01	礫	
135	III3	179	砂岩	3.5	3.2	1.8	0.03	礫	
136	III3	180	砂岩	5.7	3.9	1.9	0.05	礫	
137	III3	181	砂岩	5.2	6.7	1.3	0.1	礫	
138	III3	182	砂岩	9.7	5.8	3.3	0.2	礫	
139	III3	183	砂岩	4.4	5	0.9	0.05	礫	
140	III3	184	砂岩	9.6	8.1	4.3	0.3	礫	184+196
141	III3	185	砂岩	7.5	5.7	6.5	0.3	礫	
142	III3	186	砂岩	19.1	11.9	6.7	1.7	礫	204+242
143	III3	187	砂岩	12	12.5	4.6	0.9	礫	
144	III3	188	砂岩	9.1	7	3.3	0.2	礫	
145	III3	189	砂岩	10.6	9	4.3	0.55	礫	
146	III3	190	砂岩	8.2	6.1	1.8	0.095	礫	
147	III3	191	砂岩	11	8.7	5.6	0.75	礫	
148	III3	192	砂岩	9.9	5.7	3	0.25	礫	192+214
149	III3	193	砂岩	12.8	8.9	5.4	0.61	礫	
150	III3	194	砂岩	7.3	6.6	5.9	0.5	礫	
151	III3	195	砂岩	12.8	7	6	0.51	礫	
152	III3	196	砂岩	—	—	—	—	礫	184+196
153	III3	197	砂岩	9.4	4.5	4.2	0.2	礫	
154	III3	198	砂岩	10.9	4.8	2.7	0.2	礫	
155	III3	199	砂岩	9.3	5.3	3.4	0.2	礫	119+215
156	III3	202	砂岩	19.7	13.8	6.6	2.45	礫	
157	III3	203	砂岩	9.5	5.5	3.8	0.2	礫	
158	III3	205	砂岩	5.7	5.5	3.1	0.1	礫	
159	III3	206	砂岩	4.6	4	1.7	0.05	礫	
160	III3	207	砂岩	6.9	4.5	3	0.1	礫	
161	III3	208	砂岩	15.6	12	6.9	1.3	礫	
162	III3	209	砂岩	5.6	3.3	1.6	0.0325	礫	
163	III3	210	砂岩	8.1	4.8	3.4	0.11	礫	210+233
164	III3	211	砂岩	8.2	5.4	5	0.3	礫	

第4表 出土遺物観察表

No	屑	No	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(kg)	器種	観察所見
165	III3	212	砂岩	6.7	7.1	5.4	0.3	礫	
166	III3	213	砂岩	7.5	6.8	4.4	0.25	礫	
167	III3	214	砂岩	—	—	—	—	礫	192+214
168	III3	215	砂岩	—	—	—	—	礫	119+215
169	III3	216	砂岩	9.8	8.2	4.2	0.3	礫	
170	III3	217	砂岩	11.7	10	7.2	1.1	礫	217+247+248 (図版5・8)
171	III3	218	砂岩	8.1	3.5	3.6	0.1	礫	
172	III3	219	砂岩	10.9	10.9	5	0.6	礫	219+220
173	III3	220	砂岩	—	—	—	—	礫	219+220
174	III3	221	砂岩	12.2	6.2	5	0.5	礫	
175	III3	222	砂岩	14.1	8.6	5.5	0.7	礫	
176	III3	223	砂岩	12	8.5	3.7	0.5	礫	
177	III3	224	砂岩	11.6	7	2.7	0.3	礫	
178	III3	225	砂岩	6	3.2	3.1	0.1	礫	
179	III3	226	砂岩	13.7	9.2	7.2	0.9	礫	226+228+237 (図版5・1)
180	III3	227	砂岩	7.9	6.5	2.8	0.2	礫	
181	III3	228	砂岩	—	—	—	—	礫	226+228+237 (図版5・1)
182	III3	229	砂岩	12.5	10.8	4.3	0.65	礫	
183	III3	230	砂岩	11.4	6.6	4.7	0.4	礫	
184	III3	231	砂岩	7.8	4.6	3.6	0.15	礫	
185	III3	232	砂岩	7.8	6.3	4.7	0.3	礫	
186	III3	233	砂岩	—	—	—	—	礫	210+233
187	III3	234	砂岩	11	3.7	2.9	0.15	礫	
188	III3	235	砂岩	9.2	4	5.2	0.2	礫	
189	III3	236	砂岩	11.2	6.3	3.7	0.3	礫	
190	III3	237	砂岩	—	—	—	—	礫	226+228+237 (図版5・1)
191	III3	238	砂岩	8	5.6	2.8	0	礫	
192	III3	239	砂岩	4.9	5.5	3	0.2	礫	
193	III3	240	砂岩	5.9	8	3.1	0.1	礫	
194	III3	244	砂岩	8	6.1	2.8	0.19	礫	
195	III3	245	砂岩	9.4	5.9	3.2	0.25	礫	245+246
196	III3	246	砂岩	—	—	—	—	礫	245+246
197	III3	247	砂岩	—	—	—	—	礫	217+247+248 (図版5・8)
198	III3	248	砂岩	—	—	—	—	礫	217+247+248 (図版5・8)
199	III3	249	砂岩	4.6	3.4	1.6	0.035	礫	
200	III3	250	砂岩	8.9	6.9	3.0	0.28	礫	250+251
201	III3	251	砂岩	—	—	—	—	礫	250+251
202	III3	252	砂岩	4.7	4.2	2	0.025	礫	
203	III3	253	流紋岩	5.05	1.7	0.3	0.080	剥片	
204	III3	254	流紋岩	5.15	3.25	1.0	0.010	剥片	

第5表 出土遺物観察表

No	出土 地点	器種	部位	法量(cm)				胎土	焼成	調整		色調	備考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面		
1	3	壺	胴部					2mm以下の黒色鏡光沢の粒	良好	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	
2	7	壺	胴部					3mm以下の褐色の粒	良好		押し引き	橙	
3	11	不明	胴部					2mm以下の黒色の粒	良好	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	
4	14	不明	胴部					2mm以下の浅黄色の粒	良好	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	
5	29	鉢	口縁部						精良			灰白	
6	31	鉢	口縁部						精良			灰白	

第6表 散螺・集石状遺構の接合数・距離一覧

		散螺・集石状遺構番号・石材・礫の現況					
		S I - 1			S I - 2		
		砂	岩		砂	岩	
破碎	赤化	付着物	破碎	赤化	付着物		
0.5	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
~	6~	○	○		○	○	
1	1						
	2						
	3						
	4				○	○	
~	5	○	○				
1.5	6~						
1.5	1						
	2						
	3				○	○	
	4						
	5	○	○				
~	6~						
2	1						
	2						
	3	○	○		○	○	
	4						
	5						
	6~						
接合距離及び接合構成個数	2.5						
	1						
	2						
	3						
	4	○	○				
	5						
~	6~						
3	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6~						
3.5	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6~						
~	3.5						
4	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6~						
4	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6~						
4.5	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6~						
5	1						
	2						
	3						
	4						
	5						
	6~						
最長距離	2.90				2.80		

単位m

第IV章 まとめ

今回の内城跡の調査によって、旧石器時代から中世期までの遺構や遺物が出土した。特に内城跡の調査では、近年の縄張り調査の成果を基礎資料に、また従来2回調査した発掘調査の資料を参考に城郭の機能や性質に迫る手がかりとなった。さらに先史時代の遺物を整理していく中で当時の自然及び生活環境を垣間見ることができた。そこで以下、調査成果をもとに若干の考察を交えてまとめとする。

1 III3層／散礫・集石状遺構、旧石器

堆積土は、小林軽石の二次で構成されている。同質の堆積土がIII1層～III3層に分けて層を形成しておりIII3層から散礫・集石状遺構、旧石器が出土した。同じ内城跡で調査を行った宮崎県埋蔵文化財センター及び旧佐土原町教育委員会の同層（第4図）からは、出土遺物は検出されていない。但し、宮崎県埋蔵文化財センターの調査地は上位層のIV層縄文時代早期の遺物包含層からは、集石遺構14基、炉穴22基、土坑1期が確認されている。同じく旧佐土原町教育委員会の調査地からは、弥生時代～縄文時代の土器・石器が出土している。今回の調査地のII2層は、前回2回の調査地のIV層と同層に値するが、出土物としては縄文時代から中世期とより幅広く遺物が確認されている。この出土遺物の堆積状況から土地の利用形態が背景として考えられよう。

2 鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積土、普請関連の遺構検出面

内城跡の城郭に関する遺構は、総じて鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積土面から出土している。今回の出土した遺構は、柱穴・普請跡・性格不明土坑である。調査地点は、曲輪Iと曲輪IIの接する台地が狭まった部分東側台地上先端に位置する。台地先端の斜面は、急で天然の要害としての機能をもつ。各遺構の配置は、柱穴・性格不明土坑とも南北方向に列を成しており、また溝状の普請跡は東西方向に造成されている。この配置は、内城跡の縄張りと照合すると各遺構はそれぞれ城郭に沿った機能を果たしているのではないか。まず、曲輪Iと曲輪IIに接する堀切aは、本来は東に伸び台地先端の斜面とつながる。この防御施設によって、曲輪Iは内城跡の本丸としての立場を強固なものとしている。それに対しても曲輪IIは、曲輪Iへの前線防衛の機能を担った縄張り上の位置にある。その中で溝状の普請跡は、敵の進入を防ぐ堀切aの機能を高めていたのではないか。柱穴と性格不明土坑の出土地点は、堀切aの敷設基地の利用が最も城郭機能として考えられる。

次に、曲輪IV（第6図）からは、溝状遺構（3）、掘立柱建物跡（1棟）が確認された。曲輪I（第7図）は、溝状遺構（1）、配石遺構（2）、性格不明土坑（11）、柱穴（29）が検出された。各曲輪から出土した溝状遺構は、台地上を南北方向に普請し、それに付随した形で建物跡遺構関連の発掘を受けた。その結果、溝状遺構は、内城跡の縄張り構造の利にか

なって各所に設けられ今回の調査成果と合わせて当時の普請の一端を伺い知ることができた。内城跡が使用された時期は、從来及び今回の調査とも15世紀～16世紀代の陶磁器、土師器、須恵器など同時代の遺物を出土し、また繩張り構成を踏まえると16世紀を中心に築かれた城郭といえないだろうか。

おわりに

宮崎県埋蔵文化財センター及び山佐上原町教育委員会を含めた今回までの内城跡の調査は、いずれも曲輪の先端部にあたる。そのため城郭関連出土遺構は、地形上または繩張り上の制約を受けて簡易な建物や防御を意識した溝状の遺構が確認された。旧石器・縄文時代の遺構についても同様な制約から集石遺構・炉穴跡・土坑など主に食を満たす機能を有した遺構が出士している。今後、台地中心部（曲輪主郭部）の発掘調査を実施する機会があれば、相対的に定住を配慮した遺構が出土してくるであろう。中世の城館は、佐土原町域に多く点在しており、当時の日向地方の伊東氏の支配体制並びに島津氏との攻防を浮きぼらせていく上で貴重な文化財といえよう。内城跡は、その中の要の一つを担う城郭といえまい。

参考文献

- 宮崎県教育委員会『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ』地名表・分布地図編 1998
宮崎県教育委員会『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』詳細編 1999
佐土原町教育委員会『内城第1遺跡』佐土原町文化財報告書第19集 2001
宮崎県埋蔵文化財センター『内城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第51集 2002
佐土原町教育委員会『佐土原町の中・近世城館』2005



内城跡全景（南東から）



第1回発掘状況（真上から）

図版2



重機による表土剥ぎ



作業員による遺構検出



西側土層観察用トレンチ



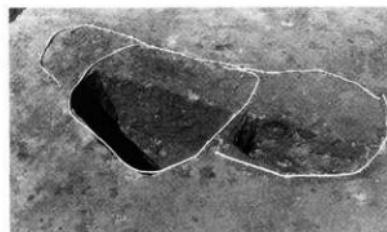
西側土層観察用トレンチ



第1回遺構検出状況



第1回遺構掘り込み作業



第1回遺構掘り込み状況

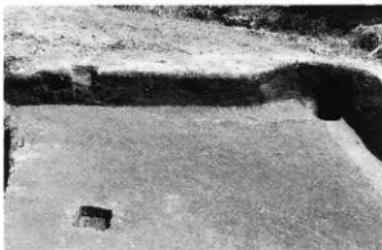


第1回遺構掘り込み状況

圖版3



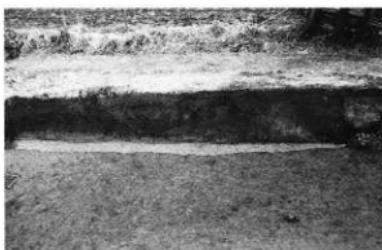
東側土層堆積狀況



東側土層堆積狀況



西側土層堆積狀況



南側土層堆積狀況



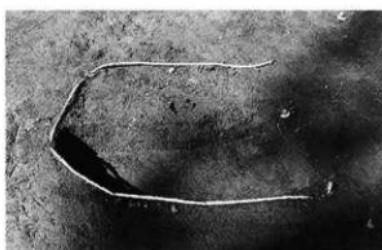
北側土層堆積狀況



遺構半裁狀況1



遺構半裁狀況2

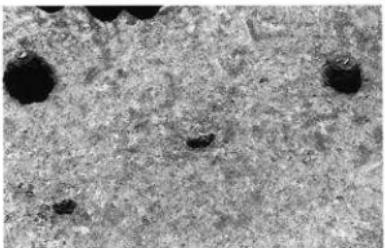


遺構半裁狀況3

図版4



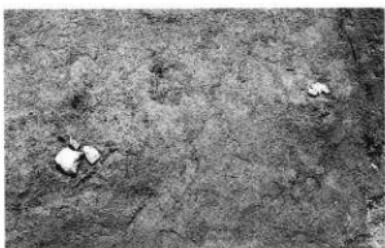
第1回遺物出土状況1



第1回遺物出土状況2



第1回遺物出土状況3



第1回遺物出土状況4



第2回遺物出土状況1



第2回遺物出土状況2



第2回遺物出土状況3



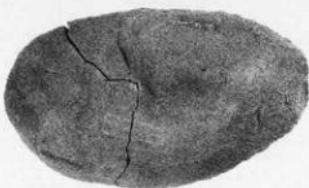
第2回完掘状況



III 3層集石状遺構出土砾1（接合）



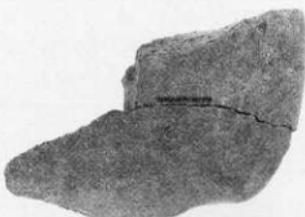
III 3層集石状遺構出土砾2（接合）



III 3層集石状遺構出土砾3（接合）



III 3層集石状遺構出土砾4（接合）



III 3層集石状遺構出土砾5（接合）



III 3層集石状遺構出土砾6（接合）

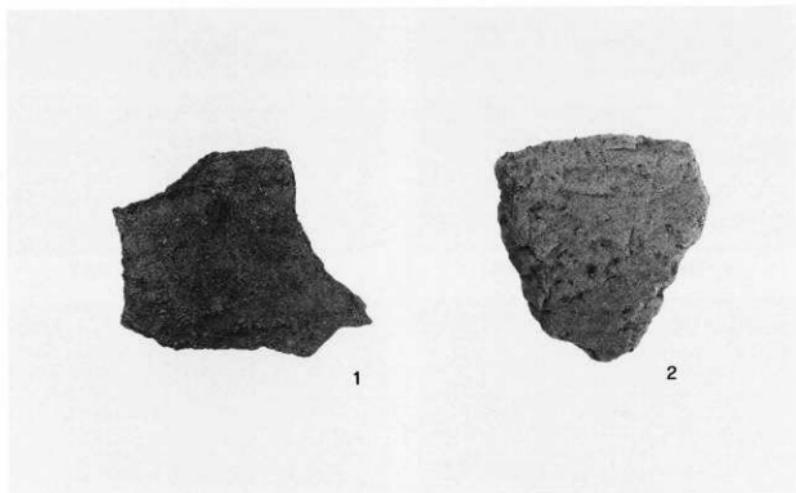


III 3層集石状遺構出土砾7（接合）

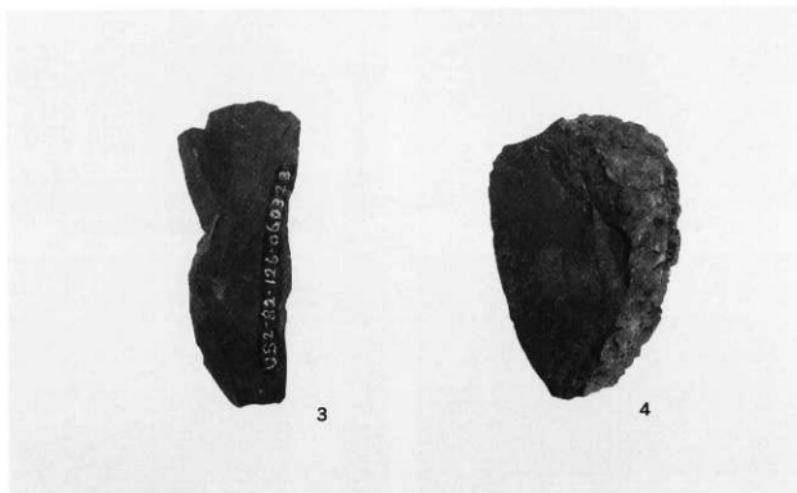


III 3層集石状遺構出土砾8（接合）

図版6



II 2層 出土遺物1



II 2層 出土遺物2

報告書抄録

ふりがな	うちしろあとはつくつちょうさほうこくしょ				
書名	内城跡発掘調査報告書				
原書名	KDDI佐上原那珂無線通信基地局工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書				
卷次					
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書				
シリーズ番号	第64集				
編集者名	木村明史				
発行機関	宮崎市教育委員会				
所在地	〒880-0805宮崎市橋通東1丁目14番20号				
発行年月日	2006年9月29日				

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村	遺跡番号				
内城跡	みやざきけん 宮崎市 佐上原町 東上那珂	45201		32度 02分 1秒 付近	131度 25分 7秒 付近	20060222 ～ 20060330	280
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
無線基地局 建設に伴う 事前調査	城館跡	中世 弥生時代 縄文時代 旧石器時代	柱穴跡 性格不明土坑 普請跡 集石状遺構	剥片 繩文土器 弥生土器 土師器 陶磁器 礫	城郭に伴う建物遺構 及び普請跡		

宮崎市文化財調査報告書 第64集

内 城 跡

2006年9月

発行 宮崎市教育委員会